序章　七月三十日

わたしたちは建物のドアをあけて慎重にあたりを見わたした。

「大丈夫。誰もいない」

スカイラー・ベンスーサンが短く告げて、わたしの先に立って歩いていく。おどろくほどきれいな顔立ち。青いメッシュが入った金髪。十九歳。身長はわたしよりずっと高い。ふとももにつけたホルスターには黒い拳銃が入っている。

わたし、梅小路佑希は遅れないようにあとをついていく。武器は木製バットしか持っていない。足手まといにならないようにしないと。

警戒しながら足早にアパートをあとにする。目的地のスーパーマーケットまでは徒歩で十分ほど。視界のひらけた大通りを選んでわたしたちは進む。路駐の車両はいくらでも見つかるが、道路を走る車はない。

人の姿は見かけない。動くものはほぼない。時刻は午後をまわってかなり経っているが、夏時間のおかげでまだ日は高い。

DST: Daylight Saving Timeのこと。夏時間。春から秋にかけて、標準時よりも一時間進めたタイムゾーンになる。ニューヨークシティでは、基準となるタイムゾーンがESTからEDTになる。

かすかに蝉の鳴き声が聞こえる。日本ほどではないが、ニューヨークシティにも蝉はいる。大量発生の年には騒音になるし、そうではない年でも鳴き声が耳に入る程度には飛んでいる。

時が止まったような街並みのなか、慎重にわたしたちは歩を進めていく。

お腹がすいていた。水はたっぷり買いだめしてあったが、冷蔵庫のなかのものはかなり食べきってしまった。はやく食料を確保したかった。

スーパーマーケットも無人だった。手動のドアをゆっくり音を立てずに開けて、スカイラーは眉をひそめた。腐った肉の臭いがする。生鮮食品はどれも無理だろう。電気は通じているはずだが冷房が動いていない。

「入っても無駄かな……？」
わたしは正直こわかった。いままで運良くイータに遭遇しないでこられたが、ここから先はわからない。スーパーマーケットは彼らにとっても狩場だ。数少ないわたしの経験からいうと、半分くらいの確率であいつらに出会ってしまうのではと思う。
「いや、せっかく危険を冒してここまで来たんだ。入ろう」
うっ、まじか。
「……わかった」
スカイラー、頼りにしてるよ。
わたしは両手で木製バットを握り込んだ。心の準備をせねば。やりたくないけど、いざというときにはこれでイータを叩く。これまで実際にやったことは一度もないけど。
意を決してわたしたちは店内に足を踏み入れた。床にはごみが散乱している。果物の皮、紙袋、プラスチックの袋、液体が残ったガラス瓶。
入り口でカゴを手にとった。なまものは無理でも缶詰くらいはあるかもしれない。そう期待して歩いていく。が、商品はほとんどがなくなっていた。
そして、悪い予感があたった。

「いる」
スカイラーは顔をそむけ、苦い表情になった。
東洋人。眼鏡をかけた若い女性。肌は青白く無表情。目か

ら涙のように血を流している。

イータだ。目につくものを食い荒らし、彼ら同士で奪いあう哀れな者たち。最初はゾンビと呼んでいたが不謹慎なのですぐにやめた。

イータは店内を緩慢に歩いている。たまに棚をのぞきこみ、なにかを取ろうと手を伸ばし、なにも取らずに立ち去っていく。スーパーマーケットには食べられる生鮮食品がもうないのだろう。パンデミックの直後はもっと多くのイータたちがここに集っていたかもしれないが、いまは彼女しかいないようだ。

こっちに来る。

「ひっ……」

慌ててわたしは什器のかげに隠れた。スカイラーも一緒だ。

あれはまだこちらを認識していない。息を潜めていればやりすごせるかもしれない。顔を出せば見つかってしまう。相手を確認することもできない。ただくちゃくちゃとイータが出す音が聞こえる。

しゃがんだ姿勢で口に蓋をして、このまま見つからないことを祈り続ける。ここはあいつの縄張りだった。店には近づくべきじゃなかった。

咀嚼音が近づいてきた。息を止める。気づかないで。どうか。

失敗だった。イータの姿をしばらく見ていなかったから安心してしまっていた。ここはふつうの人間がやってきていい場所じゃない。スカイラーはいちおう銃を持ってきている。だがぎりぎりまで撃つことはないだろう。イータは生きる屍じゃない。わたしと同じ人間で、病に感染しているだけなんだ。あれを撃つということは、人を殺すということだ。

やがてイータは去っていった。咀嚼音が聞こえなくなるほど離れたあと、スカイラーは什器から顔を出して確認した。大丈夫、もうあれは遠くへ行った。たとえいま見つけられたとしても、走って逃げられるくらいの距離だ。

まったく、なんてところに来てしまったんだ。わたしはここを訪れたことをすでに後悔しはじめていた。食料を手に入れるために潜りこんだはずなのに、下手をすると自分がイータの食料になってしまう。

逃げ帰るか？

スカイラーに声をかけようとして、踏みとどまった。

いや、スーパーマーケットまでようやくたどり着いたんだ。手ぶらで帰るのはもったいない。ひとまずの危険は消えた。

どこかに食べられるものが残っているかもしれない。これくらいの危険で諦めるなら、最初から外に出てこなければよかったんだ。探索を続けよう。

深く息を吸って、気持ちを切り替える。

さあ、行こう。なにか持って帰るんだ。できればおいしいものがいい。ここしばらくはシリアルやビスケット、栄養グミ、そんなものばかりを口にしている。イータが蔓延する前はこの場所は大量の食品を扱っていた。どこかに食べ物を隠しているはずだ。

スカイラーが小さな声で言った。

「あれ」

視線の先にあるのは冷凍食品のコーナーだ。店の壁一面のほとんどを占める冷凍ケースのなかには、ピザやエンチラーダ、チキンナゲットなんかが見える。

内部の電灯がついていて商品がわかる。ということは、いまも稼働している。つまり冷凍食品は無傷だ。イータは冷凍ケースを開けることがない。食品だと認識していないのか、冷たいのが苦手なのか、理由はわからないがとにかくそれに興味を示さない。

やった。来たかいがあった。危険を冒して外出したことは無駄じゃなかったんだ。マッシュルームのピザに、ペパロニ、グリークピザ。いっぱいある。そして隣の冷凍ケースには色とりどりのアイスクリームが詰まっていた。

Talentiだ。透明のプラスチック容器に入ったアイスクリームで、何十種類も揃っている。やばい。こいつらを全部食べていいんだ。

わたしは冷凍ケースのドアを開けてピザの箱に手をのばした。

「"Behind you!"」

「は？」

振り返ったわたしの目前にイータが迫っていた。さっきのとは別人だ。文字通り血走った目の男が突進してくる。ちょっと待て、あんたどこにいたんだよ。

「わ、わ、わわわ」

ピザの箱を投げつけるとそいつの顔に当たった。だが意に

エンチラーダ：メキシコ料理。とうもろこし製の包みであるトルティーヤでチーズや肉、野菜を巻いたもの。

介さずさらにわたしに接近してくる。
「ユキ！」
スカイラーが飛び込んできた。勢いのままにミドルキックがイータの脇腹に叩き込まれた。
イータが膝をつく。表情は変わらないけどダメージはあるみたいだ。
「逃げよう」
スカイラーがわたしの手を取って言った。
「ちょっと待って」
せめてなにか食べ物のひとつでも持って帰らないと。手が届くところにあった冷凍食品の箱をいくつかひったくった。
「待てない」
イータが立ち上がっていた。もう無理だ。抱えられるだけの箱をカゴに入れてわたしは駆け出す。スカイラーは冷凍ケースを一瞥したが、すぐにイータに向き直る。
「やれ。やれ」
スカイラーがイータを蹴った。踏みつけるようにスニーカーが腹にめりこむ。イータはそれで一歩後ずさったが、それほど効いているように見えない。
「シッ！」
さらに半回転してスカイラーは後ろ向きに蹴り込んだ。今度はイータが吹き飛んだ。さっきよりも明らかに強い一撃。
空手？　すごいよスカイラー。かっこいい。
足を引き戻して、すぐにスカイラーは走り出した。相手に背を向ける蹴りを放ったのはそのまま逃げるためでもあったみたいだ。
「走ってユキ！」
「あっごめん」
わたしも逃げるんだった。

「それ持たせて」
追いついてきたスカイラーが言った。返事を待たずにわたしが持っていたカゴをひったくった。スーパーマーケットから持ち出してきたのだ。
「えっ悪いよ」
「気にしないで」
わたしたちはスーパーマーケットを出て太陽の下を走る。あのイータは追いかけてこない。
「あの、スカイラー、ちょっと」
「"Okay."」

スカイラーはわたしの思ったことを察してくれた。わたしはその場にへたりこんだ。なんども深く早い呼吸をする。もうちょっと休んでいこう。

冷凍食品の紙箱はカゴに入れたまま持ってきた。このまま放っておいたらさすがに溶けるだろう。カゴに入れられた箱はよっつだけ。

惜しかったな。あそこでイータに見つからなかったら山ほど詰めて持って帰れただろうに。特に、あの。

「アイスクリーム、欲しかったか？」

スカイラーに図星を突かれた。

「あー……なんでわかったの」

「見てたらわかる」

そんなことないでしょ。

「ユキがTalentiのアイスクリームを取れなかったとき、すごく残念そうな顔してたから」

「……そんなに」

顔にでていたか。

「まあ、欲しかったのはたしかだけど、いまは仕方ないよ。」

咄嗟にアイスを選ばなかったのはわたしだ。氷菓子はたいして栄養にならない。いまはふつうの食事を優先すべきだと判断したのだ。

「なあユキ。今度また調達に行こう。つぎはTalentiも手に入れよう」

「そうだね」

わたしたちにはまだ機会がある。今日は冷凍食品を持って帰ればそれで十分だ。

ニューヨークでサバイバル生活を送るようになってもう二週間が経つ。日本を旅立った日から数えると三ヶ月にもなるか。こうなったいきさつを思い返すと長くなる。

始まりは、やっぱりこのスーパーマーケットだったと思う。

一章　六月一日〜七月二十一日

海外旅行でいちばんの楽しみはスーパーマーケットかもしれない。知らない食べものがならぶ棚にはしからはしまで目を通して、さすがアメリカはエナジーバーの本場やな、冷凍食品が国際色豊かすぎやろ、と誰も聞いていないのにコメントを日本語でつぶやいた。

ひととおり見終わったあと、さておみやげにどれか買っていくべきだろうかとわたしは思案する。

……あ、会社を辞めたからわたす相手がほとんどおらんな。

配れば受け取るだろう友人の数も片手で足りるくらいだ。いつもは旅行のたびに個包装のお菓子とかの適当なおみやげを選んでいるが、今回は買わなくてもいいだろう。

退職記念の一ヶ月ニューヨーク旅行。観光客らしく自由の女神やメトロポリタン美術館にも行ってみたが、地元の暮らしがわかる場所のほうがずっと面白い。生鮮食品が日本とそんなに値段が変わらないこと、ラテンアメリカの食材がものすごく豊富なこと、なんとなく入ったお店が高級スーパーマーケットで、お惣菜が妙に高かったこと。アメリカの日常を感じるだけで新鮮な好奇心が芽生えた。

帰りの日程まであと一週間。とくに予定はない。行きたい場所にはすべて行ったはず。だというのに、まだやり残したことがある気がする。このままだと満足しないままニューヨークを離れて後悔することになりそうだ。

帰国したらまず京都の実家に行って、両親に会って……。めんどい。あー、日本に帰りたくないな。

そんなことを悶々と考えていると、ふと、すれちがった人から果物が腐ったようなにおいがした。

浮浪者？　という感じでもないな。よく見るホームレスとは違って、服装はきちんとしている。

ニューヨークでホームレスを見かけることは多い。地下鉄にはよく物乞いがいるし、お店の出入り口で「いま買ったものをわけてください」と呼び止められたこともある。危険な感じではなかったが、正直こわかったので持っていたナッツを袋ごとわたした。断りそうにない人間を選んでいたんだろう。こっちは体の小さなアジア人女性、万が一暴力に訴えられたら勝負にならない。

気になったので振り返ってもういちど見てみた。太った中年女性だ。よたよたと左右に揺れながら歩いている姿からは不穏なものを感じる。買い物かごも持っていない。

まるでゾンビみたいだな。顔色が悪すぎる。

と思ったらあいてのほうも振り返り、わたしをじっと見つめてきた。

えっなに。まさかあなたも物乞いとかするの……？

驚くような速さで近づいてくる。

噛みつかれてしまった。

「ぎゃっ!?　痛い、痛い！」

振りほどいて蹴ったらその人は後ろに転んだ。近くにいた人たちが聞き取れない英語を叫んだ。

どうしよう。わたしは腕を押さえて距離をとる。

噛みつき中年女性がフルーツコーナーの什器を支えにゆっくり立ち上がった。すごく苦しそうな表情だ。あとは目とか口から血が出ていたら本物みたいだ。精神の病気とか発作とかそういうのかもしれない。

周囲の人たちはホーリーなんとかと言って後ずさりしていく。なかにはわたしの前に立って守ろうとしてくれるおじさんもいた。わーアメリカンだなーと場違いな感想が思い浮かんだ。

セキュリティのベストを着た男女が駆けつけてきた。拳銃ではなく警棒を持っている。ポリースなんとかと言ってるか

らそのうち警察も来るのだろう。

取り調べとかあるのかな。英語あんまりわからないし正直なところ面倒事に巻き込まれたくない。日本に帰るまであとすこしだし、事情聴取とか言われても英語がよくわからないし。噛みつきおばさんは顔に手を当てて苦しげな様子だが、特に暴れたりはしそうにない。

面倒だから逃げようかな？

良心の呵責は感じる。しかし……わたしがここにいなくてもいいのでは？　日本から来た観光客ができることってなにかありますかね。たしかにわたしは被害者だけど、べつに訴訟とか起こすつもりはないし、入院するような怪我ではないし。

あー、めんどい……。

ごめんなさい！

わたしは逃げた。あとは現場の人たちがなんとかしてくれるだろう。

スーパーマーケットを出てから確認してみたら、二の腕に歯型がついていた。

ふむー、どうしよう。病院に行ったほうがいいかな？　でも来週には帰国だし。アメリカの保険には入ってないし。旅行保険は買ってあるけど請求が面倒だし。たいした傷でもないから別にいいか。

宿に戻ってから傷口にバンドエイドを貼っておいた。

せっかくニューヨークに来たというのに体調がよくない。腕を噛まれたせいかもしれない。帰りの航空便までの日数は、部屋で過ごすしかないだろう。

というところに新たな問題も発生した。

「しんどいなー」

「シンドイってどういう意味？」

わたしのひとりごとにスカイラーが反応した。

「つらい。苦しいってこと」

スカイラーは大学生で、ジャーナリズムを学んでいる。偶然にも彼女の祖母は日本人で、すこしだけど日本語が話せたりする。彼女が隣の部屋にいてくれてありがたかった。

わたしが滞在するアパートメントは、知り合いに又貸し（サブレット）してもらったものだ。貸主は長期旅行に行っている。マンハッタンのミッドタウン、ヘルズキッチンに位置していて、建物

は古く、正直なところ快適な物件ではない。エレベーターがないので三階まで階段を使ってのぼっている。エアコンは窓にとりつけるタイプ。部屋を冷やすのに三十分はかかるうえにかなり大きな音がする。インターネットの固定回線はあるが、ルーターが弱いのか利用者が多すぎるのか動画が読み込めない。だからわたしはAT&Tの回線をプリペイドで購入していた。

> AT&T：アメリカの大手情報通信サービス企業。主要キャリアのひとつ。日本でいうところのＮＴＴドコモ、ａｕ、ソフトバンクのようなもの。

そのインターネットがいきなり使えなくなったのだ。外の情報をほぼウェブだけで得ていたので、こういうのはつらい。

「アパートの固定回線はどうなってるか知ってる？　固定回線……その、ケーブルでつなぐやつ」

「つながらない。それもAT&Tだから」

「まじかー」

お手上げだ。わたしは両手をあげて降参をアピールする。

「それはなに？」

「もうだめだってときのポーズ」

さてどうするか。いまから別の回線を契約する？　さすがに面倒だ。とはいえ日本に帰るまでインターネットなしは厳しすぎる。

「スマートフォンを貸して」

スカイラーが手のひらを差し出してきた。よくわからないがとりあえずスマートフォンをそこに乗せると指を引っ張られた。

「えちょっと」

「一分で返す」

指紋認証をわたしの指で解除。ディスプレイをわたしに見せながら設定を変えてゆく。同時にスカイラーは自分のスマートフォンも操作する。待つこと数十秒。

「私の回線でテザリングするよう設定した。これでつながる」

ブラウザを開くといつものホーム画面が表示された。インターネットに接続成功。

「あ、ありがとう。でもデータ料金がかからない？」

「かかるけど気にするほどじゃない。ネット回線は必要だろう？　ユキは外国人で、旅行者で、なにかあったら困るんだから」

なんでもないよ、とスカイラーはウィンクする。

「私のスマートフォンの近くじゃないとつながらないから、必要なときはそばにいて」

「わかった」

素敵な隣人がいると心強い。彼女がルームメイトで本当によかった。

日本に帰ったら彼女と会えないという事実がつらい。連絡はとったりできるけど、それだけだ。スカイラーとわたしは、ほんのちょっとのあいだだけ、ルームメイトだった関係でしかない。それは彼女の長い人生において、とるに足らない、小さな出来事だ。

……ああ、ずきっとする。

鈍い痛みが次第に強くなっているのを感じる。熱でもあったら飛行機に乗れない可能性もある。帰国までには治しておかねば。

ひどい夢から目覚めると窓の外でガラスが割れる音がした。通りを挟んだ向かいの小さなデリからだ。わたしは眼鏡をかける。

入り口のガラスドアが砕けていた。店内からは叫び声と物が崩れ落ちる音がする。しばらく見ていると、割れたドアを開けて店内から人が走り出ていった。

物音と怒号はそのあとも続いた。またドアが開き、二人の男女がすごい勢いで飛び出していく。女のほうはスリーブレスのトップスで、素肌の肩を手で押さえている。

最後に虚ろな顔つきの老人が出てきた。口をくちゃくちゃ動かして、なにかを飲み込んだようだった。

びっくりするほど早く、白地に青のニューヨーク市警パトカーが急ブレーキをかけて現れた。開いたドアから出てきた警察官たちは拳銃を男に向けて大声でなにか言った。男は警官たちに無造作に近づく。

警官たちは発砲した。初めて聞く生の銃声。撃たれた男は転んだが、それでも立ち上がろうとする。男が動かなくなるまで、立て続けに弾丸が撃ち込まれた。

その光景をわたしは固唾を呑んで見つめていた。男が息絶えたあとも、警官たちはまだ銃を構えたままだ。その一人と目があった。

わたしはブラインドを閉めて窓から離れた。目撃者ということで警察に質問されるかもしれない。面倒なのはいやだ。

しばらく心を落ち着かせる。あんなの、現実にあるんだ。

アメリカだもんね。あるよね。ニューヨークはほかの都市と比べると人口あたりの犯罪は少ないって聞くけど、それでも、日本にくらべたら多い。帰国の直前にいやなものを見てしまった。

スマートフォンを手に取ると、ディスプレイは午後八時を示していた。寝起きのせいか頭が痛い。いまから起きてももう夜だ。お腹もすいていない。うん、寝なおそう。

わたしはベッドに戻って目を閉じた。のどがものすごくかわいたのでペットボトルの水をすべてのみほした。

ベッドまであるこうとしたらころんでしまった。あたまをうったがとくになにも感じなかった。

すごくよくねむれそう。いちにちじゅうめがあかないかも。めををとじる。

あける。

「やめて、ユキ」

スカイラーがわたしにいう。

ごめんスカイラー。

「やめてって。本気で言ってるよ」

わたしはスカイラーにてをのばす。それから。

——おいしい。ほんのすこし、歯を立てただけなのに。

たすけて。

またなんか変な夢を見てたな。内容は忘れたけど。

「ふわあああ、あ、あれ？」

目を開けて体を起こしたところで、異変に気づいた。部屋が荒れている。地震のあとみたいに、床に本とか時計とかがちらばっている。わたしが寝ているあいだにだれかが入ってきた？　鍵はかけたはずだけど……。じゃあわたしがやったのかな？

「あいてっ」

なぜかわからないが筋肉痛がある。肩とか足とか全身がうっすら痛い。なんだろ、考えられる可能性として、二日酔いで記憶がないとか。いやアメリカについてからアルコールはまったく飲んでいないはずなんだが。とにかくなにかがあったのは確かだ。

視界に自分の髪が入ってきてうざったい。こんなに伸びてたっけ。まえに切ってもらってからそんなに経ってないはずなんだけど。そして、臭い。ずっとお風呂に入らないで、掃除をしないで暮らしていたようなにおいがする。まじかよわたし。

「よっ……と。いてて」
わたしはベッドからおりた。スリッパが置いてあるはずなんだけど見当たらない。仕方がないので裸足のままドアのほうに向かう。
「……なにこれ」
鍵を外したはずなのにドアが開かない。すきまから覗いてみると、むこうがわになにかがある。そしていま気づいたのだが、木製のドアからはネジの先端部がとげみたいにとびだしていた。あぶな。へたに触ったら手が傷つきそうだ。誰がやったんだこんなの。
というか……。もしかして。外からこのネジでドアが固定されてる？　つまりわたしは閉じ込められている？　いやいやいや。そんなあほな。
どうすりゃいいんですかね。
「スカイラー？　そこにいる？」
とりあえず隣人に助けをもとめてみる。
「ユキ？　起きたの!?」
スカイラーの声が返事をしてきた。
「そうだよ。なにかあったの？　ドアが開かないんだけど」
「待ってて！　いますぐ行くから」
どたどたと足音が聞こえてくると思ったら本当にすぐにドアが開かれた。そこにいたのは、口を開いて、なにか言いたそうだけどもなにも言わないで、ただわたしをじっと見つめるばかりのスカイラー。
「おはよ」
とりあえず朝のあいさつをするわたし。
ドアのむこうがわについていたものが目に入った。あ、そういう風になってたんだ。日曜大工でやったみたいに適当なつくりだけど、木の板がネジでドアに固定されている。そこに自転車のU字ロックがとりつけられていて、外から鍵をかけられるようになっている。
……やっぱりわたしは閉じ込められてたんだ。なんじゃそれ。サプライズとかドッキリとかそういうやつ？　文化が違うのかな。さすがに友達でも監禁されるのは冗談じゃなすまないって……。
「ユキ」
スカイラーがいきなり抱きしめてきた。
お、おい、おい。ちょっと。え？　待って待って。わたし臭いよ？

「あ、あ、あ！　なに？　ええー？　ちょっとスカイラー」
「よかった」
「なにがあったの？　わかんないよ！」
そうしてしばらく彼女はわたしを離さなかった。

「ニューヨークシティは疫病にかかった人たちであふれかえっている。彼らは健康な人を見ると危害を加えてくる。外を出歩くのは危険だ」
は？　えっと……。
「ごめん、もういっかい言って」
英語力が足りないせいで、言っている内容を聞き間違えたんだろう。
「外はあぶない。病気になった人がいっぱいいる。彼らはかみついてくる。ユキは外に出るな」
ゆっくりと簡単な英語でいいなおすスカイラー。なるほど、わたしの英語力が足りないわけではないのか。
「……その、ゾンビ・アポカリプス、みたいなやつ？」
「そうだ」
半分ふざけて訊いてみたのに、スカイラーは真剣な顔のままだ。

ゾンビ・アポカリプス：ゾンビが大量に出現して文明が崩壊した後を描く物語のこと。映画でいうと、アイ・アム・レジェンド、28日後…、ゾンビランドなどが有名。

まいった。
「来てくれ。見たらわかる」
そう言ってスカイラーはわたしの手を引いた。つれてこられたのは共同で使うダイニングキッチンだ。その窓を彼女は指差した。
「あれがイータだ」
窓の外、地上三階から見えるニューヨークシティの街並みは、いつもとは様変わりしていた。ふだんのヘルズ・キッチンはつねに人と車が行き来するせわしない場所のはずだ。それが静まりかえっている。

よく見ると人間たちの様子がおかしい。あっちに行ったりこっちに行ったりと、目的なく歩き回っているような気がする。その顔は無気力で、なかには目から血が流れている人もいた。

たしかにゾンビみたいだ。

二章　七月二十一日〜七月三十日

スカイラーがことの顛末を話してくれた。

いや、話してくれたのだが、英語があまり聞きとれないわたしには、理解がちょっと難しかった。スカイラーはゆっくりていねいに説明してくれたが、それでも飲み込めた気はしなかった。わたしの鈍い反応を見て彼女はすこし考えこんだが、なにか思いついたのか自分のMacBookを開いて持ってきた。

「これを読んでくれ」

そう言って、彼女はMacBookのディスプレイをわたしに見せてきた。そこに表示されているのは、大手新聞社のウェブ記事だ。ブラウザの上に見えるURLが file:///Users/ から始まっていたので、このMacBookにダウンロードしたものだとわかった。つまりはオンラインではないようだ。

ヘッドラインのすぐ近くに、顔にモザイクがかけられた暴れる人々の画像が見える。そして、森のなかで撮られたらしい、猿の写真もあった。

アマゾン川流域にウーリーモンキーと呼ばれるクモザル科の小さな猿がいる。現地では食用ともされていたが、近年は個体数が減り、好きこのんで狩る者は少なくなった。

ある男がウーリーモンキーに襲われた。二ヶ月ほど前のコロンビアでのことだ。ジャングル探検ツアーに家族で参加していた彼は、川下りの途中で不意に水面にあらわれたウーリーモンキーに腕を噛みつかれた。幸いにしてたいした怪我でもなかったので、医者に診てもらうこともなく彼はツアーを続行した。

彼はコロンビア出身だがアメリカに帰化しており、子供と妻を連れて旅行していたところだった。異変が起こったのは彼らがニューヨークシティに帰って六日後のことだ。

発熱と頭痛の症状を呈していた彼は、看病していた妻に噛みついた。妻は子供とともに家から飛び出し、彼のほうも自宅をあとにして路上をさまよい歩き目につく人を襲い続けた。警察に逮捕されるまでの三時間で、彼は少なくとも二十八人に噛みついていた。

留置場でも彼は正気を失った様子で、質問に答えず、人間を見ると危害を加えようとした。

妻と、ほかの噛まれた者たちは一週間ほどの潜伏期間ののち、高熱、頭痛、めまいといった症状を訴えた。その後昏睡

し、目覚めてからは彼と同様の心神喪失状態になっていた。彼らは目につく人間すべてに噛みつこうとした。

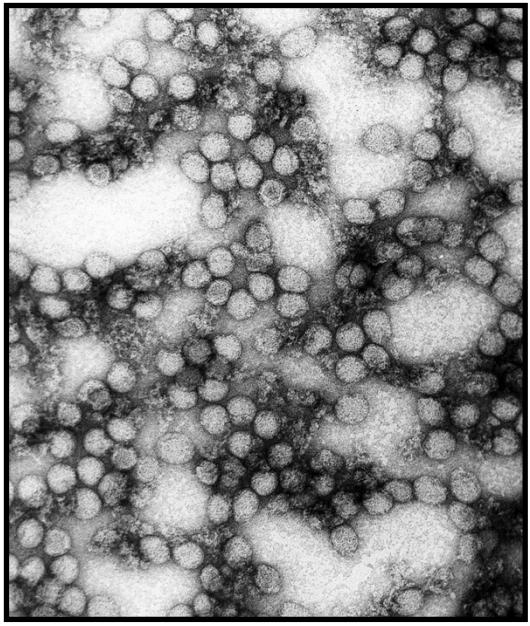
検査の結果、彼らは Mitu virus（ＭＩＴＶ）というフラビウイルスに感染したことがわかった。フラビウイルスのなかには日本脳炎やウエストナイル熱を引き起こす種があるが、従来知られていたＭＩＴＶは感染した人間に疾患を起こさないもののはずだった。

感染者たちが保持していたのは、新種の変異株だった。人を凶暴にさせるという症状は、イータと名付けられたその変異株でだけ起こるものだ。狂牛病やシカ慢性消耗病のように宿主の行動を変容させる感染症は多数あるが、ここまで人を攻撃的にする病は初めてのものだった。なおWHOは病をMIDと命名したが、人々はイータと言い続けた。いつしか感染者そのものもイータと呼ばれるようになった。

公衆衛生局は感染者に噛みつかれた人たちを何人か見逃していた。

そしてイータはニューヨークシティで恐ろしい速度で広まった。

「ちょっとそれは大変すぎでは？」



ウェブ記事を読む手をいったん止めて、スカイラーに言ってみた。

「そうだな」

変わらず、真剣な表情のままで答えてくれた。

たまに出てくる知らない英単語をスカイラーに訊ねながらじっくり読んで、わたしはようやく顛末が飲み込めてきた。

記事の発表された日付を見ると。あれ。
「一ヶ月以上経ってる？」
ありえんでしょう。
思わず訊きなおしたが、スカイラーは神妙な顔でうなずいた。
「ああ。ずっとユキは意識を失っていた」
まじか。
スカイラーに手渡されたMacBookのディスプレイに目を向けなおす。やれやれ、大変なことになったぞ。わたしはつばを飲み込んだ。
発病すると暴徒になる人々を前に、当初は警察が必死に対応した。イータとなっても相手は無辜の市民。いきなり射殺などできはしない。逮捕と拘禁による隔離と治療。それでなんとかなると期待したのは一瞬のことで、すぐに力不足が明らかになった。感染した人間に対して警察官が少なすぎる。イータに噛まれた人々もまたイータになる。警察官のなかからも感染者があらわれるようになり、ついに限界がきた。
大統領令が発令され、連邦軍・州軍がニューヨークシティに派遣された。各区域を封鎖し、イータの兆候のある者が発見されれば警告なしの「無力化」が実行された。建前上は、危険でなければいきなり発砲はしないことになっているが、現場の判断がすべてを左右する。増えすぎたイータを傷つけずに拘束するのはもはや無理だろう。
大統領令と同時に避難計画が始まった。だが全員が一度に避難することはできない。"Phased Evacuation"のプロセスが現在も進行中だ。
「段階的避難？　えーと、どういうこと？」
よく知らないことばが出てきたのでスカイラーに質問した。
「要するに、ゆっくり逃げるんだ。感染した人をニューヨークシティから出すわけにはいかない。暴露から症状が出るまでの潜伏期間が一週間ほどあるから、無症状でも疑いは完全に消えない。だから、住民は世帯ごとにグループに分けられて、まず選ばれたグループだけが避難キャンプに引っ越して潜伏期間を過ごす。ほら、こっちのセクションに、詳しい説明が書いてある」
スカイラーがウェブページをスクロールして、説明文を指差してくれた。
「ふーん、なるほど……。いや、よくわからないけど、そういうのがあるんだ」

「このウィルスのためにCDCが作った避難手順だ。大がかりなプロセスで大変だけど、安全のためにはこれくらいやらないといけない」

CDC：アメリカ疾病対策センター。疫病などの予防と対策を行う政府機関。

避難キャンプの中も世帯で区切られていて、シェルターからは自由に出られない。潜伏期間が終わったら感染していないことが証明できるから、そこでようやくニューヨークシティから脱出できることになる。空いたキャンプには次のグループが入ってくる。これを繰り返すのがフェイズド・エヴァキュエーション。

なるほど。ニューヨークシティの外に感染者を出さないように、慎重にことをすすめないといけない。そのためにこんな面倒な手順にしているのか。

記事を読み終えたが、疑問はいっぱいある。この記事は一ヶ月以上前のものだけど、いまでは状況が変わっているはずだ。

「避難って、まだ続いてるの？」

「ああ。州軍や連邦陸軍のシェルターを使い、避難キャンプは各地に急造された。大きいところでは千人以上がそこに一

時滞在できる。もうかなりの人がニューヨークシティを離れている。残っているのは、運悪く避難計画の最終盤に順番が来た世帯か、よほどの事情がある人間だろう」

避難の話を聞いて、わたしは日本でかつて発生した震災を思い出す。震源から近かった原発の施設が壊れ、そこから放射性廃棄物が漏れた。一帯の放射線レベルが高くなり、近くの住民は避難を余儀なくされた。

いま起こっているイータの感染はそのレベルのものだ。この場所から逃げなければ生命の危険がある。

だがいつまで？

「イータの感染はあと二ヶ月もすればおさまる」

あっさりスカイラーは言い放った。

「え……終わるの？　ずっと続くんじゃないかと思ったよ、わたし！」

「終わるよ。すべてのイータが餓死すれば」

「は……？　は？」

「あたしは本気で言ってる。政府はイータたちが餓死するのを待っている」

彼女の声は震えていた。餓死、ということばをひときわ強く発音した。

スカイラーがMacBookのディスプレイをまた見せてきた。そこにはテキストエディターのアプリケーションが開かれている。

「あたしが書いた文章だ。読んでほしい」

「うん」

――ニューヨークシティで発生したパンデミックに端を発する一連の出来事に対応して、大統領令が発された。その条項には以下の内容が含まれている。ニューヨークシティの封鎖とさまざまな供給の停止だ。

大統領令の狙いはイータの餓死だ。

イータはスーパーマーケットやデリを襲撃して、生鮮食品を奪って食べている。数週間もすればそれらは枯渇する。イータたちには食物を生産する知能がない。彼らは消費することしかできない。政府の計算によれば、ニューヨークシティから食べ物が尽きるまで二ヶ月ほどかかる。

しばらくイータをニューヨークに閉じ込めて、彼らが飢えるまで待てば、問題は解決する。そう大統領や周囲の人々は信じているらしい。CDC（米疾病対策センター）もその方針に従っている。

感染した人が餓死するまで待つ。治る可能性があるのに放置する。これが人道に反する行いと呼ばずになんと呼べばいい？

政府の言い分はこうだ。感染した人を保護する余裕がない。一刻も早く鎮圧しないとイータがニューヨークの外へと広がってしまう。病人を保護するどころか世界が終わるかもしれない。だからいまは残酷なようだが犠牲を受け入れるしかない。

議会は割れているが、賛同を示す者は多い。共和党のジョン・マーキー上院議員は感染者をすべて見捨てるべきだとSNSに投稿し、その後批判を受けて撤回した。スタッフが勝手に投稿したと釈明したが、本心は明らかだ。

市民を見捨てること、それが最善の解決策だとアメリカ政府や議員たちは信じている。

さっき読んだ大手新聞社のウェブ記事より、もっと表現が固く、強い文章だ。プロの記者の文より読みづらかったが、彼女が抱いている感情は理解できた。

「ねえ、怒ってる？」

「もちろん」

「読んでてわかった」
スカイラーは目を伏せた。口を固くひきむすんで、言いたいことを必死に我慢しているようだった。
「ごめんスカイラー、ちょっと休憩」
スカイラーにことわって、わたしはその場を離れた。
いきなり英語の文章を大量に読み込まされたので疲れた。たとえ日本語であっても長い説明文を読むのは楽ではない。情報を処理するのに時間がほしかった。
アパートメントの内部階段から屋上に行ける。錆びついたドアを力いっぱい押し開けて、ひさしぶりの空に再会した。いつも聞いていた騒音は感じない。まるで別世界に来たみたいにひっそりとしている。あの、眠りの邪魔をしていたざわめきが懐かしく感じるくらいだ。
朝焼けがきれいだった。いちにちの始まりの時刻。高層ビルのある東から日がのぼりつつある。
念のため、スマートフォンの電源を入れてみたが、アンテナマークはひとつも立たない。
「やっぱり電波はないね」
朝だというのに暑い。季節が変わったのを感じる。ほんとに一ヶ月以上経ってたんだ。わたしの髪が伸びたのも当然だな。
視線を下に向けると、イータの群れと目があった。ぶらぶら適当に歩き続けるグループといった様子だけど、あれがウィルスに感染して凶暴化した人たちだという。
「うええー、現実感がないよーう……」
日本からアメリカにやってきて、ニューヨークで観光して、気づいたらゾンビアポカリプスになってました。住民はゆっくり避難していってます。アメリカ政府はゾンビを飢えさせる作戦を実行中です。そういうのはフィクションのなかだけにしてほしいんだけどなあ……。
ぼんやりした、頭のうらがわに残った感触がある。あれはなんだったかな。そう、今朝見ていた夢だ。詳しい内容は覚えていないけども、夢のなかでもわたしはニューヨークにいた気がする。なまなましい展開だったような。よくできた映画みたいな、つながりの整合性がある夢。
忘れかけていた夢。
「ユキ」
いつのまにかスカイラーが後ろに立っていた。
「起きたばかりなのに長い説明を聞かせてすまないね」
スカイラーはわたしのそばに並んで謝った。ここまで近い

と身長差がずいぶんはっきりする。スカイラーを見上げる格好で、わたしは彼女に向き直った。
「ユキが治って本当によかった」
……治って？
わたしの反応でスカイラーは表情を変える。
「そうか、おぼえていないのか。ユキはウィルスに感染したんだよ。そして回復した」
ああなるほど。
そういうことだったんだね。
「ユキはイータだったんだ。もう治ったけど」
夢の感触が、全身に残る筋肉痛とつながる。あれは現実だったんだ。一ヶ月以上も経っていたのはつまり、イータになっていたからなんだ。
納得。それと、諦め。ゾンビから逃げるんじゃなくて、わたしがゾンビでした。
……おいおい。
まさかだよ、ほんとに。
「わたし、あんなのだった？」
眼下に見える、不規則に歩く人たち。
「ああ。びっくりするぐらい暴れていたよ。わたしが部屋に閉じ込めて、外に出ていかないようにしていたから、誰も傷つけていないけども」
「そうなんだ。安心した。ありがとうスカイラー」
「どういたしまして」
自分の手をじっと見つめてみる。特にゾンビらしくなったところはない。完全に回復したと考えてよさそうだ。
「治ったのは、いいことだよね」
変な英語表現になったけど言いたいことは伝わったと思う。
「一ヶ月以上、ずっとわたしのお世話をしてくれていたの？」
「ああ。まあ、そうなる」
「ありがとう。……ほんとうに、ありがとう」
目の奥と表面の感覚に、わたしは慌ててスカイラーから顔をそむけた。
「ユキ？」
「なんでもない」
こんなことで泣いちゃうなんて恥ずかしい。見ないでよスカイラー。

共同キッチンダイニングにもどってティーバッグのお茶を淹れた。ゾンビアポカリプスの状況でも、電力の供給は保たれているみたいだ。一ガロンのペットボトルが床に積まれているから、水の心配もしばらくはしなくていいだろう。

椅子にすわって、スカイラーと向きあう。状況を整理しよう。

いま、わたしのいるニューヨークシティには、イータ……ゾンビみたいな人たちがいっぱいいる。市民のほとんどはもう避難した。軍が地域を封鎖して、感染の広まりを防いでいる。

「スカイラーはどうしてまだ逃げてないの？　避難の順番がまだ来てない？」

「いや、もう来たが無視した。ユキがいたから」

「な……なんで？」

どうしてわたしが出てくるんだ。

「放っておけないだろ。感染したんだから。あんたの面倒をみなきゃならない」

「そっか。……ありがと」

そうだ。わたしはイータに噛まれ、感染した。そして回復したばかりなのだ。あの、現実と悪夢が入り混じった記憶がぼんやりと頭に残っている。わたしの二の腕にはまだ歯型がうっすらとついている。あの日、スーパーマーケットで噛みつかれてから、数日で症状があらわれ、意識を失った。気づいたら一ヶ月以上の時間が経っていた。そのあいだはスカイ

ラーがわたしを世話していたらしいが記憶にない。空白の期間になにが起こったのかこうしていま教えてもらっている。

「わたしたちも避難できる？」

イータになったら避難はできない。凶暴になってしまうし、ほかの人にうつす可能性があるから当然だ。では治ったいまはどうだろう？

「――もちろん避難できる。ユキはもう完全に治ったんだよ。人に噛みつかないから感染を広める恐れはない。兵士たちも、さすがに回復した人間を撃ったりはしない。あと何週間かすれば避難キャンプが空く。そうすればあたしたちも避難開始だ」

「よかった」

じゃあ、そんなに危機的な状況じゃないんだ。しばらく耐えれば、日本に帰れる。

「でもすぐには避難できないんだね」

日本にいる友人や親は心配しているだろう。スカイラーによると、いまは連絡をとるのも難しいらしい。ＩＳＰがサービスを停止したからインターネットにはつながらない。なら電話か、せめて手紙でも送れればと思うのだが、簡単ではないようだった。大きな避難キャンプに行けばそこから手紙を郵送できることにはなっているが、避難キャンプにたどり着くまでにイータに遭遇する危険がある。そうまでしても、できることは手紙を送るくらいだ。ならばリスクを取る必要はないとスカイラーは言った。

ＩＳＰ：インターネットサービスプロバイダーのこと。インターネットに接続するのに必要なサービスを提供する。

「避難キャンプなんだけど、わたしたち二人分の空きくらい、ちょちょっと作ってくれないのかな？　世帯単位で入るんでしょ？　一人暮らしの世帯とかに混ざって、入り込めるんじゃないかな」

「無理だ。同じことを考えた人たちもいたが、すでにルールがかなり厳格になっている。この数週間で、避難キャンプのなかで隔離期間中に発症した例が何度もあったらしい。家族じゃない人が混ざると感染が広がる確率が高まる。避難キャンプに入るには順番を待つしかない」

「じゃあ、車とかでニューヨークシティを脱出できないか

な？　避難キャンプに行かなくても、こっそり逃げられたらそれで解決じゃん」
「あたしもちょっと考えてみたけど、それも無理だ。軍に見つかって拘束される。さすがにいきなり撃たれたりはしないだろうけど、ふつうに逮捕されるだろうな」
　剣呑な話だ。
「軍はウィルスの封じ込めに神経質になっている。特に、ニューヨークシティから出ようという人間をひとりも逃そうとしない。感染していようがしまいが関係ない。いま政府がいちばん恐れているのはウィルスが外に出ることだ。実際、北のブロンクスから脱出しようとしたグループがいたが、全員が逮捕された。いまの封鎖区域は国境よりも行き来が難しい。必死になれば出られるかもしれないが、リスクが高すぎる。前科者にはなりたくない」
「なるほど、そんな感じか……。ウィルスはまだニューヨークシティの外に出てないの？」
「いや、発症前の感染者が何人かニュージャージー州やヨンカーズで見つかった。だがまだ大規模な感染は発生していない。ここで頑張れば感染を封じ込められるとＣＤＣ（米疾病対策センター）の専門家は主張している」
　いまが踏ん張りどころ、ということか。
「あの、わたし以外にも治った人はいる、よね？」
　そう聞くとスカイラーは目をそらして答えた。
「わからない。自警団みたいなことをやってる連中にもたまに情報交換しているんだが、少なくとも聞いたことがない」
　避難しなかった者はそれぞれが自衛を始めた。銃を手に教会に集まって暮らし始めた人たち。家族だけで閉じこもった人たち。
「ユキみたいにイータ株に感染した家族をかくまってる人もいると思う。数は不明だけれど」
　そういう事情でニューヨークシティに残らざるを得なかった者もいるのだろう。
「うーん」
　なにかが引っかかった。スカイラーがあえて言わないでいることがある気がする。
「ねえ、いまニューヨークシティではお店とか営業してないよね？　水と食べ物はどうするの？　わたしたちもイータみたいに餓死しちゃわない？」
　非常食で食いつなぐ？　いやいや、一週間ももたないぞ。
「あたしたちもイータ同様に食べ物を取りに行く。スーパー

マーケットとか、人の家から」
「……いいの？　万引きじゃない？」
「いまだけは盗んだことにならない」
スカイラーによると、事態が収束するまでという条件つきで、超法規的措置がとられるらしい。そのための大統領令も発令されたのだとか。
つまり、アメリカ政府は略奪を黙認するということだ。
「まじか……」
さすがは自由の国。
「まったく、ばかげたことだよ。これまで商店とかはずっと万引きに苦しめられていたっていうのに、いまだけは許可するんだって？　正気じゃないよね」
さすがに我慢できなかったのか、スカイラーは荒い口調になった。
いちど深呼吸して、彼女は続ける。
「――でも残念だけど、生きるためには仕方がない。あたしたちも略奪をしないと暮らしていけない。ユキ、わるいけど、あなたにも手伝ってもらうよ。空き家から食べ物を盗んだり、スーパーマーケットから万引きしたりする。あたしたちは泥棒になる」
「……わかった」
生まれて一度も万引きなんてしたことがないけど、やれと言われたら、やるしかない。
「ニューヨークシティでの市民の略奪で生まれた損害は、あとで政府が補償するって言ってる。そんなにたくさん盗むつもりもないけど。せいぜい、食料と水と、生活必需品。あとはサバイバルに必要なものだけを調達していこう」
「う、うん」
「そんなに気負わなくていいよ、ユキ。なにを調達するかはあたしが考えるから。スカイラー・アンド・ユキ盗賊団のリーダーはあたしだ。まあ、適当にやっていこう」
おどけた様子でフィストバンプの仕草をするスカイラー。ちょっとびっくりしたけど、わたしもそれに拳をあわせた。

フィストバンプ：ふたりで拳をつきあわせるジェスチャー。

「あたしにとっても、わくわくする気持ちがまったくのゼロと言ったら嘘になる。まあ、わくわくするなんて言うべきじゃないけど」

スカイラーはいたずらっぽく笑ってウィンクした。
「ユキ以外には言わないよ。秘密にしてね」
「……うん、わかった」
こうしてスカイラー・アンド・ユキ盗賊団は結成された。
それはそうとして。
「あの、基本的なことを聞くけど、ゾンビみたいな人たちは、わたしたちを見たら襲いかかってくるんだよね」
「ゾンビって言ったらだめだよユキ。人間なんだから」
「あっごめん。えーと、じゃあ、イータが。外にいるんだから……スーパーマーケットとかに行くのはあぶないんじゃないの？」
「ああ。あぶない」
「えー……」
「だから気をつけて行く」
それでいいのかよ。
いやしかし、それはいいとして、問題は食料だけじゃない。
街から人は消え、いくつかのインフラは放棄されたらしい。水道局や電力会社はまだがんばってくれているようだが、それもいつまで続くかわからない。
「サバイバルしなきゃいけないわけか」
日本から来た観光客にどうしろっていうんですかね。
「ねえスカイラー、わたしたちみたいにまだ避難していない人たちも近くにまだいるんだよね。その人たちのところで一緒に生活できないのかな」
「やめといたほうがいい。みんなピリピリしてる。家族ではない人と一緒に過ごすのは、そう簡単なことじゃないんだ」
「でも、いまは非常時なんだから、協力しあったほうがいいんじゃ」
「だめだ。他人は感染しているかもしれないんだ。危険性のある人と同じ場所にいるべきではない。そう考える人がほとんどなんだよ。だからあたしも他のグループとは距離を保っている」
「それはそうかもだけど……じゃあ、ふたりだけで、頑張らないと、だね」
「心配するなよ。あたしがなんとかしてやる。ユキはあたしを頼ってくれていいんだ」
「ふぇ？　いやしかし、未成年に頼ってしまうのは……」

アメリカでは二十一歳未満が未成年とみなされることが多い。州によって異なる。

たしかに彼女はわたしがニューヨークに来てからというもの、なんども助けてくれた。わたしのほうが年長だというのに、スカイラーは迷わずにこちらを導いてくれる。彼女がいるなら、ひどい苦境でも耐えていける気がする。

そうだね。スカイラーがいれば、なんとかなるよね。

「……わかった」

わたしはあなたを信じるよ。

あとで振り返るとスカイラーは嘘をついていたわけだけど、彼女を信じたことは間違ってなかったといまでも思う。

目覚めた次の日から、わたしとスカイラーは食料の調達を始めた。まずはアパートメントの同じ階の部屋から。ドアには鍵がかかっているから、非常階段から窓を破って侵入した。

片付いた部屋もあったし、散らかって、すでに略奪されたように見えることもあった。もし泥棒に鉢あわせになるとまずいので、念のために中に人がいないかノックで確認してから窓を破ることにした。わたしたちも泥棒かもしれないけど。

同じ建物に住む人たちの部屋を見るのはちょっと楽しかった。食料以外にも様々なものが見つかった。武器になりそうな包丁、ハンマー。カラフルな食器。スペイン語の絵本。自動車のキーなんてものも発見した。どこに停めた車かわからないけれど、この建物に住んでいたのだから遠くはないだろう。そのうち使えるかもしれない。

しばらくのあいだは建物の外に行かないようにした。外に出たら、いつイータに遭遇するかわからなかったからだ。

二週間くらいはそれでなんとかなった。

たまに窓から地上を見下ろして、イータたちの様子を観察することがあった。彼らはたいてい集団で行動するが、たまにぽつんとひとりでいる者もいた。

スカイラーによると、イータたちは食べ物を拾い集めて暮らしているらしい。スーパーマーケットや住居、レストランのキッチン、食品倉庫、そういった場所の近くで徘徊しては食べられるものを探すそうだ。トイレとか行ってるんだろうか。まさか外で？

ちなみにわたしがイータだった頃は、コンポストトイレをわたしの部屋に置いていたとスカイラーは言っていた。災害

時とかキャンプで使うものらしく、微生物が排泄物を分解してくれる。Home Depotで調達したものらしい。わたしを監禁しながら、たまにお世話をしていたとのことだ。ということは、イータでもトイレの使い方はわかっているんだろうな。理性を失っているのにトイレを使えるなんておかしな話だけど、そのへんでしてくれないのはありがたい。

> Home Depot：アメリカの大手ホームセンター。マンハッタンにもいくつか店舗がある。

食品倉庫にいるようなイータなら、食べるものには困らないだろう。そうしてずっと生き延びることもできると思う。じゃあ、食べ物がない場所で生きているイータはどうなるんだろう？　アメリカ政府が狙っているように、いつかは餓死してしまう？　あるいはわたしのように治癒しないものか。スカイラーは、治ったイータをわたし以外に知らないと言っていたが、何千人とイータがいて、何週間も経っているのなら、どこかで誰かは回復していると思っていいのではないか。

そんなことを考えながらスカイラーとともに一日一日を過ごしていたが、やがて限界がきた。アパートメントの建物にある食べ物をすべて消費しきったのだ。

ついにわたしたちは決意した。外に出るのだ。初めてスーパーマーケットに行き、冷凍食品を調達したのがそれだった。イータに遭遇したり、ほしかったTalentiの氷菓子を入手できなかったりと残念なことはあったが、成功とはいえるだろう。われわれは食料を外で調達するという目的を達成したのだ。